

家族から
亡き夫を想う



古川 紀江

脳梗塞の発病を恐れ、食生活には特に気をつけていたのに、こともあろうに胃癌で逝ってしまうなんて。

脳梗塞発作後二か月目には、リハビリのおかげで左半身に少々の不自由さを残して、日常生活はほとんど自分で出来るようになりました。

しかし、信じられないような性格の変化に、侵された脳の説明を医者からうけるまでは、葛藤の日々でした。

その後、地域の脳血管障害者の会などに参加し始めましたが、最近のキレる子供のよう、自分の思うようにいかないと「もう、やめた」の連続でした。

そのような時、自立研究会を紹介され森山先生御夫妻にお目にかかり、「会に入れてもらえたよ」と嬉しそうに言った日の事は今もよく覚えております。

発病から二年近くたっていましたので、脳のほうも少し落ち着いてきたのでしょうか、この頃からいろいろなことに前向きに取り組めるようになりました。

会報の編集も引き受けてきて、家族にも意見を求め、一緒にパソコンも勉強しました。

会に出席しても、自分の意見を主張し通したと思いますが、厳しく、やさしく、接していただけたことに、感謝しております。

「理解してもらえる」ことが一番必要だったのです。

しばらく平穏な日が過ぎておりましたが、一昨年5月突然胃癌の診断を受けました。

寝耳に水でしたが、夫の強い再起力を信じ、胃の全摘手術を受けました。

今思えば、本人はとても不安だったのでしょうが、退院後は普通の生活に戻れました。でも、不安が的中して年末に再発、夫

は強い意志を持って「治療」にかけました。

しかし、抗ガン剤の投与が始まると、みるみるうちに体力がなくなり、食事も摂れなくなりました。

ほんの数ヶ月の間に「死」という言葉に向き合うようになりました。

「家に帰りたい」という言葉を受け、私も点滴などの講習を受け、体制を整えました。

家に帰って三週間。アイスクリームを一口食べ「おいしい」と言って、翌朝眠るように逝きました。

病気になって初めて我が家に帰った夫との七年間、病を中心でしたが、中身の濃い七年間でした。

それ以前の夫のことを昔の同僚や後輩の方がいろいろ教えてくださいました。

今、莫大な資料や本を整理しながら、仕事を愛した夫を偲んでいます。

